

会報・会誌編集の記録

山室 真知子

(京都南病院図書室)

はじめに

近畿病院図書室協議会(以下当会)の会報発行は、当会設立総会終了直後開かれた第1回役員会(現在の幹事会)において決定された。

創刊号は1974年12月に「設立総会報告・特集号」として会設立までの経過報告とアンケートの集計報告を掲載し、当時の22会員及びアンケートに協力された病院へ発送された。

“…この協議会の三人の発起人、そして発会までの準備に参加された方々、皆お互いに初対面の方ばかり、これからはもっと多くの病院図書室の方々とお知合いになれることを大変喜んでいきます。どうぞよろしく。”

会報創刊の嬉しさに、私は創刊号の編集後記にこう書いている。

わずか22機関であったが、会報の発行は、会にとって病院図書室の組織としての活動を、そして病院図書室の担当者に必要な情報を届ける主要な役割を荷って続けられてきた。

今年度末(1990年3月)で、通巻90号となる。

1. 会報発行の意味

会報の発行は幹事会の報告、研修会の案内等の連絡事項をはじめ、会と会員とを結ぶ手段としての大きな役割をもつものであり、研修会に出席しない限り殆ど顔を合わせる機会がない図書室担当者同士の、意見の交換の場としたい。そして会報も会員からの率直な意見、批評をもとに内容を充実させていくことが、これまで歴代の編集委員がいてきた願いであった。しかし会員、または読者からの投稿は編集者の方から依頼しない限りこれまで殆どなかったのは残念に思う。

一方、編集者から読者へのメッセージともいえる編集後記の欄は重要性を認識しながらも、掲載事

項が多い場合には必ずしも最初に割愛しなければならない箇所となってきた。

会報の性格づけについて、これまで終始検討された点は、会の報告、案内等の連絡を密に、速報性をもたせることを第一とするか、単に通知するだけでなく、読者に役立つ内容の記事にするのか、である。

当初は、会員への連絡、案内を密に、そして迅速に知らせるために、少数ページ、月刊で発行することに決めた。

その後も、会報のあり方、役割、内容、速報性について、論議が交わされてきた。

このことは、会報の形態、発行頻度を大きく左右する問題である。

今まで試みた月刊4ページ、隔月刊8ページは前者、後者ともいづれもその目的を果たすには不相当であり、前者を優先する場合には会報をハガキ形態に…と考えた一時期もあった。

しかし、“会報は私にとってオアシス…”といった会員の声が聞かれた程、私たちは病院図書室に関する情報や、知識の糧となる資料に飢えていた時期であった。それ故に編集者も求められるままに研修会の内容や、技法記事等を載せがちとなり、会員や読者には喜ばれたが、編集者側ではそのたびに反省が繰り返されてきた。

また、購読会員を会発足当時から募っていたこともあり、会員相互の連絡を主体とした会報に徹しきれなかった理由もあった。

充実した内容のものを掲載すると、記事によっては所定のページ数を越えがちとなる。それはそのまま発行の遅れと、発行予算上にも影響を及ぼすことは明らかである。

この問題の解決策として、会報と会誌の二本立てとして、それぞれの性格を明確にすることにし

た。

(参照：3. 会誌「病院図書室」の発行)

2. 編集方針

a. 発行頻度

速報性を考えて月刊、4ページで創刊した会報は、第2年目には研修会の内容、技法記事が多くなり発行日の遅れ、予算の超過等の問題上、3年目より隔月刊とし8ページとした。結果的には事務連絡と論文等二本立ての掲載となり、好ましい成果はあげられなかった。(Vol. 3-5)

事務連絡はひんばんに、論文等の記事については時間的余裕をもたせてまとまったものを掲載する方法として、1979年度(Vol.6)より会誌「病院図書室」(年2回発行)を創刊し、会報、会誌の二本立てとした。そして会報の恒常的な発行の遅れを是正し、事務連絡、会の活動報告を密に、そして速報性をもたせるために再度月刊としたが、従来の会報との切り替えができず、1・2号及び7、8、9号の合併号を含めて10号までしか発行できなかった。この年は日本病院会の全国図書室研究会(第2回)が当協議会の共催で初めて近畿地区で開催されたこともあり、幹事の多忙から編集作業にも影響をもたらしたものと考えられる。

会誌「病院図書室」も年1回の発行にとどまった。

1980年度(Vol.7)以後は隔月刊で発行されたが、1988年度(Vol.15)まで発行の遅れは是正できなかった。会報の内容が報告、案内及び連載記事の場合は比較的編集がやりやすいが、依頼原稿はどうしても遅れがちとなり、その時々印刷所の状況によって左右されることも多かった。理由はともあれそれらの障害に対処して決められた日に発行できなかったのは編集部の弱さであると認めざるをえない。

b. 掲載記事について

4頁建ての基本的な誌面構成は、巻頭言(1頁)、研修会、学会等の報告記事(2頁)、病院図書室紹介記事(新会員病院・3頁)、役員会・幹事会報告、会の活動報告・案内・おしらせ、会員消息

等の連絡事項、編集後記(4頁)となる。

巻頭言は、当初編集委員が持ちまわりで書くことを原則にして、約数年続いた。この頁を借りて当会の目標、考え、問題提起を広く会員に知ってもらえるようにテーマを選定していたように思う。現在では総会時または会長交替時には会長の挨拶文や、会員に原稿を依頼することが多くなった。

会員病院と新しく入会した会員病院図書室の紹介記事として、3頁に「病院図書室紹介」欄をもうけて連載し、現在までに37病院が掲載された。

最終頁は会の報告、連絡、案内事項を掲載してきた。その他、お知らせ・会員消息などを載せた余白を編集後記とした。この欄は編集者から読者へのメッセージを何か一言送るために大切なスペースであったが、殆ど連絡記事で埋められてしまった。

1, 3, 4頁は以上のように掲載記事が決められており、2頁に掲載する記事を毎号企画した。寄稿文、翻訳論文(注1)、テーマを設けての小特集、文献紹介、そして研修会報告等で、これらの原稿はどうしても増ページの原因となりがちであった。

やがて、日本病院会全国図書室研究会及び図書館情報サービス研究大会が開催されるようになり、発表者からは発表要旨を、または出席者に感想等の報告を依頼して、当会の定例研修会報告に加えて掲載した。一人担当の多い病院図書室では研修会への出席は儘ならず、まして他地区で開催される場合はなお難しい。担当者のレベルアップのために何とか研修会の様子を知らせたいと考え、その手段としてまず、会報に掲載する方法しかないのである。これまで隔年、当協議会が日本病院会と共催の下に開催してきた日本病院会全国図書室研究会の全記録は、会誌「病院図書室」の方に掲載するようになった。

しかし、現在年3回の定例研修会の記録については今もって懸案事項となっている。毎回会員の研修のために講師が時間をかけて準備した資料は貴重なものであり、充分利用されるべきものである。会員のための会報ならば出席できなかった会員や、これからの新しい会員や担当者の教育のために、

出来れば会報誌上に残していくべきだろう。このことは、研修部でも考えられてきた問題でもある。

また、一般会員から投稿が殆どないため、時々、一つのテーマについての小特集を企画し、何人かの会員に原稿を依頼して、紙上参加を試みてきた。

一方、会員の会報に対しての期待はどうか。

JMLAの研究集会、セミナー、関係団体の研修会等に参加できるようになって業務の都合で出席できなければ、せめていながらにして会報からの知識や情報に期待するであろう。

購読会員からも、会報への期待としては、一つのテーマについての特集、講演・研修会の内容、病院図書室に関する情報や業務の知識、ヒント等という希望が聞かれた。

(購読会員より 会報No 65)

このような会員の希望する記事を掲載していると、当然頁数も増え定期の発行日より遅れがちになる。これでは、会報の本命である連絡の速報性を欠き、印刷費予算を大幅に超過し財政にも支障を来してしまうことになりかねず、編集者にとってはいつもジレンマに陥るところである。

この問題を解決し、会報の性格、役割を正すべく1979年度(Vol.6)より会誌「病院図書室」を創刊し、会報・会誌の二本立てとしたが、従来の会報との切替えが難しかった。

3. 会誌「病院図書室」

会報を会員間の迅速な情報交換や案内、連絡等を中心として機能するように、そして私達独自の研究発表の場を広げる目的で、会誌「病院図書室」を発刊した。当初年2回の発行を考えていたが、原稿量や予算を考慮すると年刊がようやくであった。Vol.1(1979年度)及びVol.2(1980年度)はNo1と付したが、両年度ともNo2は発行できなかった。

これまでの号の内容

Vol.1 発刊の辞・第5回総会記念講演・事例報告4題・他

Vol.2 寄稿3編・事例報告4題

- Vol.3 寄稿2編・事例報告4題
- Vol.4 近畿病院図書室協議会10周年記念講演
・年次統計集計・マニュアル作成報告
・第18回医学図書員研究集会論文2編
他
- Vol.5 1984年度日本病院会全国図書室研究会特集
- Vol.6 寄稿2編(第41・44回研修会講義)
第20回医学図書員研究集会論文1編・
研修会報告2編
- Vol.7 1986年度日本病院会全国図書室研究会特集
(1986)
- Vol.8 寄稿1編(第51回研修会講義)・「図書室におけるコンピューター利用」について4編
(1987)
- Vol.9 1988年度日本病院会全国図書室研究会特集
(1988)

年6回(隔月刊)の会報発行に加えての会誌年1回の発行は、原稿の量も多く非常に荷が重い仕事であった。編集担当者を会報と会誌に分担してみた年もあったが、発行日の遅れはほぼ慢性化した状態であった。その原因は原稿の集まりが悪く、早くから原稿をいただいた方には本当に申し訳なくお詫びする次第である。

Vol.9(1988)は、1988年度日本病院会全国図書室研究会特集号であったが、発行の遅れを是正するために、研修部及び全国研実行委員会の方に編集をお願いし、年度末に発行することが出来た。

4. 編集委員・編集作業

編集委員はこれまで3~4名が、幹事の役割分担で決められてきた。今回、これまでの編集委員のリストを作成してみたが、4名の時は1977~79年度のみで、年度途中で1名欠員となり、2名となったこともあった。幹事が少なかった1984年度は、一般会員から1名参加してもらった。各年度の編集委員は表1の通りである。

編集作業は、
編集委員会(企画)→原稿依頼(または調査・アンケート依頼)→(原稿催促)→編集(レ

表1. 各年度の編集担当者名簿

年 度	編 集 部 員 (初出の場合は所属病院名)
1974	山室真知子(京都南病院)、千住とも子(日生病院)、石井 順子(京都保健衛生)
1975・6	山室真知子、林 伴子(社会保険神戸中央病院)
1977	首藤 佳子(星ヶ丘厚生年金病院)、小田中徹也(国立京都病院)
	福味美津子、北沢 洋子(国立大阪病院)、林 伴子
1978	首藤 佳子、小田中徹也、福味美津子、北沢 洋子、林 伴子
1979	首藤 佳子、北沢 洋子、林 伴子、小田中徹也
1980	山室真知子、林 伴子、湯浅 伸一(行岡保健衛生学園)
1981	山室真知子、浜口 恵子(高槻赤十字病院)、湯浅 伸一
1982	山室真知子、小田中徹也、浜口 恵子
1983	山室真知子、加島 民子(大阪回生病院)、林 伴子
1984	加島 民子、林 伴子、*安達貴美子(西淀病院)
1985	山室真知子、林 伴子、黒川 淳子(耳原総合病院)
1986	山室真知子、湯浅 伸一、中嶋 和子(西宮市立中央病院)
1987	山室真知子、湯浅 伸一、中嶋 和子
1988	山室真知子、中嶋 和子、中井貴美子(阪和記念会館)
1989	首藤 佳子、中嶋 和子、前田 元也(西淀病院)

*：幹事外

アウト) → 印刷所へ発注 → (印刷中発送準備 — アドレス・シート、封筒) → 校正 → (訂正箇所の確認) → 納品 → 発送 → 会員外の寄稿者へ謝礼

の工程で行なう。隔月刊の発行を3名の編集委員で行なう場合、この工程の途中で次号の準備、即ち次号の工程が始められていなければならない。年刊とはいえ会誌1冊を含めると、一年間を通して息を抜くひとときはない。

編集作業の中で印刷所の選定は編集担当が変わると地域的な問題もあり印刷所も変わってきた。2～3号以上発行されると、印刷所も要領がわかってもらえるが、それまでは双方とも苦労を繰り返してきた。作業分担も印刷所の関係から均等な作業量に分けにくく、企画(全員)の他は、

(1) 原稿依頼、誌面校正(レイアウト)・

(2) 印刷発注、校正、受注、発送 (3) その他(1・2の共同作業を含む)に大別されてきた。

実際にはなかなか計画どおりには行かず、ともすれば毎日の図書室業務に押し出されがちになる。

その上、企画が決まらない、何回催促しても原稿が来ない、執筆を辞退された、印刷が出来上ってから誤植が見つかった(発送までの場合は1冊ずつ訂正)等々、長い間編集担当をしていると様々なアクシデントに出会ってきた。一番困ることは原稿が予定のスペースを越えた時、原稿を削除してもらうことも、次号の原稿と差し替えることもできなければ増頁にせざるをえないことである。増頁の場合は2頁増しとなるので、余白の頁を埋める原稿を急拠準備しなければならないのである。手持ち原稿がなく、発行日の遅れの原因となることが多かった。

校正作業は、複数の人で目を通すために、以前は郵送して行なったので2～3日を要した。最近ではファクシミリの利用で非常に便利になった。それでも、原稿を印刷所に手渡す時は、いつも“これで間違いはないだろうか?”という不安が伴なう。まさに試験用紙を提出するときの気持……といえお分かりいただけるだろう。

ともあれ、印刷所から会報が刷り上ってきた時、まず“見落とした誤植がないか？”という一抹の不安がよぎるが、それでも「出来あがった！」という、安堵のひとつときでもある。そして、早々に次号の苦勞がはじまるのである。

5. 発行部数と発送

会報の発送部数は、当初 100 部で、各年度の最終号は「総会号」として 200 部であった。「総会号」の増刷は、入会案内や当会の紹介に配布するためである。その後、会員の増加にともない、会報発行部数はすべて 200 部となった。

会誌「病院図書室」の発行部数も 200 部である。会報・会誌の発送先は次のとおりである。

当会会員 71 (1990.1.31 現在)

購読会員 28 (会報・会誌共)

3 (会誌のみ)

寄 贈 24

近畿地区医学図書館協議会加盟館、日本医学図書館協会、国立国会図書館、日本図書館協会、医学中央雑誌刊行会他

交 換 6

病院図書室研究会他、他地区病院図書室関係団体の機関誌と交換

6. 発行費（印刷費と発送費）

これまで各年度の会報・会誌の発行費は表 2 のとおりである。

表 2 各年度会報・会誌発行費

年 度	期 間	年 間 経 費	備 考
1974	1974.11~1975.11	152,770	
1975・6	1975.11~1977.3	162,910	
1977	1977.4~1978.3	130,690	
1978	1978.4~1979.3	193,125	
1979	1979.4~1980.3	340,960	会誌No.1印刷、発送費を含む
1980	1980.4~1981.3	227,935	
1981	1981.4~1982.3	365,280	
1982	1982.4~1983.3	540,350	会誌No.2印刷、発送費を含む
1983	1983.4~1984.3	366,015	会誌No.3印刷、発送費を含む
1984	1984.4~1985.3	171,650	
1985	1985.4~1986.3	813,190	会誌No.4・5印刷、発送費を含む
1986	1986.4~1987.3	418,470	会誌No.6印刷、発送費を含む
1987	1987.4~1988.3	156,790	
1988	1988.4~1989.3	546,750	会誌No.7印刷、発送費を含む
1989	1989.4~1990.3		

7. 購読会員のこと

会設立当時、会員数22機関で、会費 2,000 円であったため財政的には非常に苦しく、収入源として会報に購読会費と広告料を設けた。

前年度からの繰越金もなく、会費の殆どを会報の印刷費として費やしてしまうため、会を賛助してもらおうという意味で購読会員を募ることにし、主に書店、製本業者や他地区の病院図書室担当者

に協力を願った。また業者からは広告の援助もうけた。この広告は会員へ紹介する意味も兼ね、製本準備に必要な注意事項が添えられた極東バインダリー社の広告は会員に役立つものであり好評であった。

最近広告は、会誌の裏表紙のみ掲載している。

現在の購読会員は、書店・製本社等業者 8 社、図書館 2 機関、個人 18 人（うち病院図書室担当 17

人)である。個人の場合は購読希望によるものである。

ちなみに購読会費は会報・会誌共で3,000円、会報または会誌のみの場合は1,500円である。

8. おわりに

長く会報・会誌編集を担当してきた者として、この15年を振り返ってみた。たった4頁のうち、どうしても1頁分の原稿が入手できず自分の拙い原稿で埋めた号、4頁の予定が1頁増え5頁になり6頁目の原稿に苦労した号、とにかく編集部は原稿がなければ手も足も出ない。“原稿は待つだけではなく作るもの”、また“書かない編集者は失格、まず自ら書くこと”と、この道の先輩からアドバイスを受けたことがあるが、この点では私は編集部員として適任ではなかったかもしれない。

理由はともあれ発行日遅れのお詫びの編集後記が目に入るたび、今でも身につまされる思いがする。

当協議会の10周年記念に「年表」を作成した時、会報の記録の重要さをひしと感じ、その後は充分記録を大切にしてきたつもりであるが、今回、まだまだ不十分な点があった。

この15年間の記事の中には、現在なお引きづっている問題がある。大学医学図書館と病院図書室のネットワークのこと、病院図書室の基準化のこと、いずれも会創設時からの問題であり、現在まで何度もこの原点に立ち返り、記事になっている。

このテーマについては今後更に私共が考え、論議を重ねていかねばならないが、その度にこれらの記事をもう一度、読み返す必要がある。特に新会員の方及び新しい担当者の方々は、これまでの経過を知るためにも是非読んで戴きたい。

この15年間に何とんでもOAの普及はめざましい。従って人の手に代わって機械で合理化されることにはなったが、その基盤となる図書室の日常業務の基礎知識がすべて古くなってしまった訳ではない。今回改めてバックナンバーを見直してみたが、研修会報告・技法記事のなかには充分役立つものがあつた。研修会にのみ期待せず、当会

で作成した「病院図書室マニュアル」と併用して自己研修を試みてほしい。

そのためにも、今度作成された会報・会誌の総索引も大いに活用されることを願いたい。

(注1)病院図書室の機能、基準化については会設立当初からの問題であり、これに関する情報を外国文献から検索していた。その中から2編翻訳されて会報に掲載した。(No.6:3、1975、No.7:2、1975、No.19・20:3、1977)翻訳者は笹井外喜雄氏(元京都南病院院長)と首藤佳子氏(星ヶ丘厚生年金病院司書)である。